

金沢市中心街の言語景観:
観光地・商業地・市役所の調査

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/34611

金沢市中心街の言語景観

——観光地・商業地・市役所の調査——

経済学類3年 中村 明修¹

横田 哲郎²

別司 大典³

<概要>

金沢市の言語景観というテーマで、観光地・商業地・市役所という3地区に見られる看板の調査を実施した。看板の設置されている場所の違いによって、使用される言語表現にどのような違いが出るのかをそれぞれの場所の特徴を考慮して言語景観形成のメカニズムを明らかにする。

第1章では、金沢市の代表的な観光地である兼六園と東茶屋街で調査した結果を報告する。観光地を訪れるのは金沢市民だけではなく、他の地域住民や外国人も多い。出身地域や文化的背景の異なるさまざまな人たちが集まる場所では、どのような看板が言語景観を形成しているのかが明らかにされる。第2章では、商業地としての香林坊と堅町の調査結果を紹介する。香林坊は大和デパートや香林坊109などを擁する金沢の代表的な商店街である。他方、堅町は古くからある商店街と新しくできた商店街の2地区に区分できる。利用者層の違いが看板の言語景観にどう反映されるのかが示される。第3章では、金沢市役所と小松市役所という2つの公共機関の調査結果を比較する。市役所の利用者はもっぱらその地域住民である。金沢市には留学生を始めとして外国人が多く住んでいる。同様に、小松市も外国人比率が高いと言われる。しかしながら、両地域での外国人住民の位置づけが違うようである。それが庁舎内の言語景観にどう影響しているのかを比較により明らかにする。

<キーワード>

言語景観；観光地；商業地；市役所；外国人

¹ Email: whirl_ak19_embrace@i.softbank.jp

² Email: yokotable2@i.softbank.jp

³ Email: 00mth00@gmail.com

<目次>

1. はじめに
2. 観光地（中村 明修）
 - 2.0. 兼六園と東茶屋街
 - 2.1. 兼六園の言語景観
 - 2.2. 東茶屋街の言語景観
 - 2.3. まとめ
3. 商業地（横田 哲郎）
 - 3.0. 香林坊と豎町
 - 3.1. 調査方法
 - 3.2. 結果
 - 3.3. 考察
 - 3.4. まとめ
4. 市役所（別司 大典）
 - 4.0. 金沢市役所と小松市役所
 - 4.1. 調査方法
 - 4.2. 予想
 - 4.3. 結果と考察
 - 4.4. まとめ
5. おわりに

参考文献

1. はじめに

言語景観 (language landscape) とは、私たちの周囲にある景観の一部は言語により形成されるという考え方に基づいている。バックハウス (2005: 53) は、言語景観を「道路標識、広告看板、地名表示、店名表示、官庁の標識などに含まれる可視的な言語の総体」と定義している。街には多くの看板や表示板があるが、そこにはさまざまな言語表現が認められる。これらがその地域の言語景観を形成している。観光名所や商店街、大学や駅など、たくさんの方が集まるところには様々な看板が設置されている。それらの色や形、大きさや表記内容は、その看板が設置されている場所や、設置する目的によって異なる。その中でも、その看板に使用されている言語表現はその看板を見る人、つまり看板が設置されている施設の利用者によって、その表記の仕方も異なってくる。例えば主に子供が多く利用する施設の看板には、難しい漢字は使用せず平仮名表記がなされていたり、もしくは簡単な漢字だけを使用し、さらにその漢字に振り仮名をうつなどして子供でも理解できるような工夫がなされているだろう。また、日本人だけではなく外国人もたくさん集まるような施設にある看板には、日本語表記だけでなく、外国語表記がされているだろう。

私たち社会言語学ゼミではこのような言語景観に注目し、看板にどのような言語が、どのように表記されているかを調べ、その言語から見えてくる地域の特性を調査しようと考えた。特に金沢市の中心街を観光地、商業地、市役所に区分し、それぞれに設置されている看板の目的や、利用者の違いによってどのような違いが見られるのかを調査した。観光地には外国人がよく訪れるであろうから、それを対象にした言語景観が形成されていると考えることができる。商業地では若者が利用するのか、高齢者が利用するのかによってそれぞれ異なる言語景観が形成される。最後に市役所だが、地域特性の異なる2つの金沢市役所と小松市役所を調査対象とした。

2. 観光地

2.0. 兼六園と東茶屋街

観光地を訪れるのは、その地域住民だけではなく他の地域からの来訪者もいる。また観光地では、日本人観光客だけではなく、外国人観光客も多く訪れる。そのような観光地の看板には日本語表記だけでなく日

本語以外の外国語表記を見ることが出来ると予想される。この章ではまず始めに、金沢を代表する歴史的な観光地である兼六園の言語景観の調査報告をし、つぎに東茶屋街の言語景観の調査報告を行う。東茶屋街は兼六園ほど有名な観光地ではないが、兼六園と同じく歴史的な観光地である。同じく歴史的な観光地である両者の違いを比較するためにこの2か所を選択した。

2.1. 兼六園の言語景観

2012年9月12日に調査を行った。調査方法としては、兼六園内部に見られた看板をすべて撮影し、その看板に使用されている言語、文字の順番や大きさなどを集計、分類を行った。分類した結果、兼六園の看板は大きく4つに分けることが出来た。

2.1.1. 日本語・英語

まず、日本語と英語の2カ国語表記である。写真の枚数で言うと、17枚撮影することができた。兼六園に入ってすぐの所にあった開園時間などを知らせる看板や、兼六園内部にある名所や、トイレの場所を示した簡単な案内板などが2カ国語表記であった。文字の大きさは日本語が大きく英語が小さめ、文字の順番は日本語→英語の順であった。

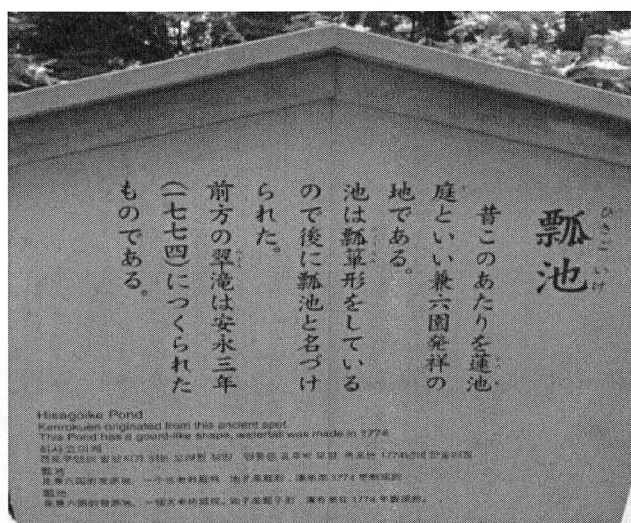


上の写真は、入口付近で見られた開園時間を知らせる看板である。

2.1.2. 日本語・英語・韓国語・中国語

次は4カ国語表記である。この表記の看板の数が一番多く、39枚撮影することが出来た。兼六園での注意書きの看板、名所の説明をした看板、兼六園全体の地図の看板などがこのような表記の仕方であった。使用されていた言語は日本語・英語・韓国語・中国語(簡体字)・中国語(繁体字)であり、順番はこの表記の通りである。文字の大きさは日本語が一番大きく、他の言語は小さめ。他の言語での文字の大きさの違いは見られなかった。

下の写真は各名所の説明をした看板。日本語で大きく表記され、その下に外国語表記が見られた。



2.1.3. 日本語・英語・中国語

次に3カ国語表記である。これは1枚しか見ることが出来なかった。6ページ上部にある写真のように、冊内に立ち入ることを禁止した看板で、使用されていた言語は日本語、英語、繁体字の中国語であった。

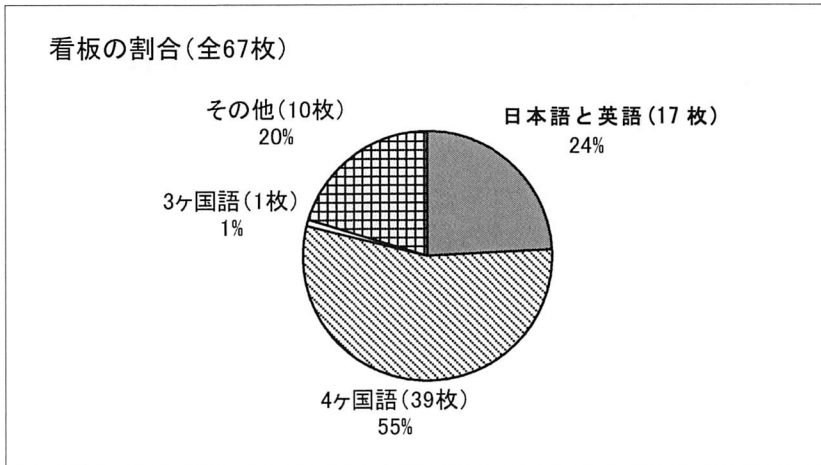


2.1.4. その他

最後にその他の表記である。ペットを連れ込むことを禁止した看板や、トイレ内部の案内板である。これらは日本語のみの表記であったが、言語表記だけでなく、ピクトグラムや点字での表記が見られた。全部で10枚撮影することが出来た。



看板の数の割合をグラフに表すとつぎのようになる。



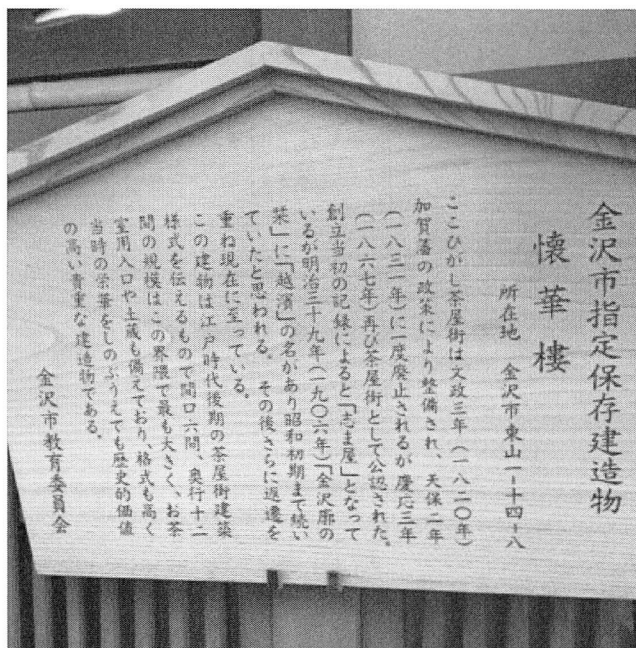
兼六園のまとめとしてまず、日本語がやはりメインであった。表記される順番や文字の大きさでも日本語が一番多くあり、どの看板についても日本語表記が見られたので、やはり日本語がメインの言語として使用されていると言える。もう1つの特徴としては日本語の次に重要視されている言語は英語であるということだ。表記の順番で日本語の次に来るのはほとんど英語だということ、日本語と英語のみの看板があることからそのように考えられる。またピクトグラムが使用されているときは外国語表記があまりなされていなかったということも特徴である。これはピクトグラムがあれば外国人でも理解できるので、必ずしも外国語表記する必要がないためだと考えられる。

2.2. 東茶屋街の言語景観

次に東茶屋街の調査である。2012年11月16日に調査を行った。調査方法は兼六園とほぼ同じである。今回も前回と同様に大きく4つに分類することが出来た。

2.2.1. 日本語のみ

まず日本語のみの表記の看板である。49枚撮影することが出来た。この表記が圧倒的に多かった。歴史的な建物の説明の看板や店の説明の看板などに多く見ることが出来た。また警察署が設置している進入禁止の看板も日本語のみの表記だった。



2.2.2. 日本語・英語

次に日本語と英語の表記である。14枚撮影することが出来た。東茶屋街の簡単な案内板、手を触れないように注意を促した看板などがあつた。

写真は東茶屋街の休憩所の位置を示した簡単な案内板である。大きな日本語表記の下に、小さな英語表記があつた。



2.2.3. 日本語・英語・韓国語・中国語

次は4カ国語表記である。6枚撮影することが出来た。お手洗いを示す看板や、休憩所を示す看板、東茶屋街の全体の地図の看板などである。使用されていた言語は日本語・英語・韓国語・簡体字の中国語・繁体字の中国語であった。

写真はお手洗いの看板である。左に大きな字で日本語表記がされ、その右にその他の外語国語表記がなされていた。



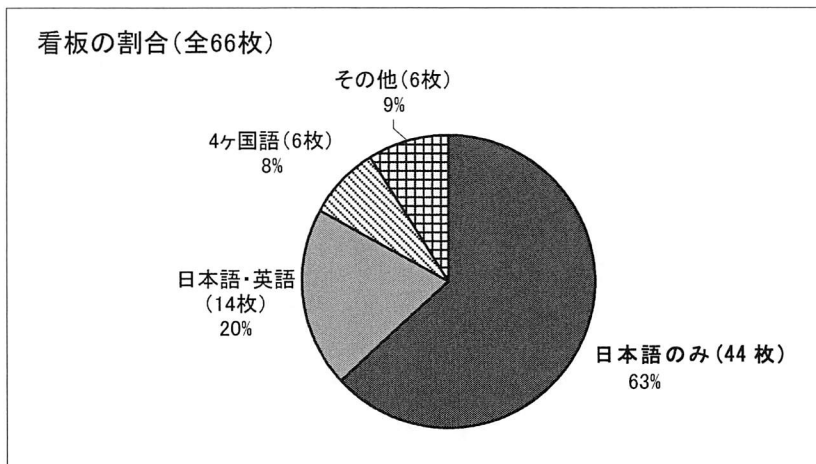
2.2.3. その他

最後に英語・中国語・韓国語の表記で日本語表記がないという看板や、日本語と点字の表記といったものである。これらの看板は6枚撮影することが出来た。

下の写真は英語・中国語（簡体字・繁体字）・韓国語の表記だけで日本語の表記がなかった。このような看板は珍しかった。ピントが甘いのが日本語がないことがわかる（「金沢市」は除く）。



東茶屋街の看板の割合をグラフにするとつぎのようになる。



東茶屋街の言語景観のまとめとしての特徴はまず、日本語のみの表記が圧倒的に多かったということである。兼六園では日本語のみの表記の看板がほとんどなかったのに比べて、東茶屋街の看板は約6割が日本語のみの表記であった。そのため逆に外国語表記が少ないという特徴があるとも言える。特に英語以外の中国語や韓国語はそれほど多く見ること

が出来なかった。

2.3. まとめ

兼六園と東茶屋街を比較すると、兼六園の方が、外国語表記が多く東茶屋街は日本語表記が多いということである。これは兼六園の方が多くの外国人観光客が訪れることが理由として考えられる。また言語そのものではないが、兼六園や東茶屋街などの歴史的な観光地の看板は、木製の看板であったり、派手でない色遣いがなされていたりと、その観光地の景観を壊さないような工夫が見られた。

このように観光地の言語景観は、その観光地を訪れる人によって使われる言語が左右されるようだ。英語が使われるのは英語を話すことが出来る外国人が多いこと、英語が母語の国でなくても、英語を第二言語として理解することが出来る国が多いことから英語の表記が多いと考えられる。中国語と韓国語が多いのはやはり、中国と韓国が日本と地理的に近く、観光に訪れる人も多いことが理由であろう。このように観光地の言語景観は、その観光地に訪れる人に合わせて形成されることが分かった。

3. 商業地

3.0. 香林坊と堅町

商業地に関する調査の報告に入る。

今回の調査では、香林坊周辺と新堅町（タテマチストリート）と旧堅町（新堅町商店街）を選択した。香林坊と堅町を調査地とした理由は、香林坊は金沢市および石川県内で有名な商店街であることや大型店を中心とした日本海側の商業地として県外から訪れる人も多数いることがあげられる。香林坊は金沢市内のバスのほとんどが経由すること、また、始点・終点とすることから交通の便も良く、利用者も多いことが予想される。客層に関しては、若者をターゲットにした「KOHRINBO109」や全世代（特に中高齢者）をターゲットにした「香林坊アトリオ（香林坊大和）」があることから、香林坊全体としては広い客層を相手にしていることが分かる。また、香林坊は観光地としての機能も有していることから、看板は、日本語のみの表記が少ないと予想される。

他方、堅町を選択した理由は、古くからある「新堅町商店街」と近年若者をターゲットに発展してきた「タテマチストリート」があり、両商店街の客層の違いが看板の傾向にはっきりと現われている可能性がある。

るからである。タテマチは、「北陸 No.1 のファッションストリート」と呼ばれることもある。こちらの商店街には大型ファッションビルを含む約 200 店のショップがあり、アパレル関係の商店が中心である。立地条件も香林坊に近いことから同様に交通の便がよく、外来の利用者が多いことが予想される。さらに、タテマチではイベントの実施も多く、近年は県内の大学生とコラボレーションした「タテマチアート」などを開催している。ほかにも様々なイベントが定期的に行われている。一方、新堅町商店街は周辺の人々のための生活必需品を売るための町屋として古くに発展した場所である。

以上の点から商業地としての調査場所に 2 つの地域は適していると考えられる。

3.1. 調査方法

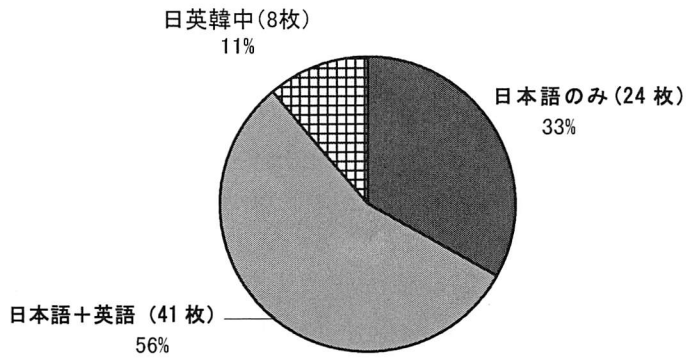
香林坊での調査は 2012 年 9 月 13 日に実施した。香林坊での調査では、案内板と指示板を対象とし、50～100 枚のデータ収集を目標とした。案内板と指示板を対象とした理由は、香林坊はデパート型の商店が多く、また観光地としての機能を有していると考えたからである。実際の調査では 73 枚のデータを収集した。

また、堅町での調査は 2012 年 11 月 15 日に実施した。堅町での調査では、商店の看板を対象とし、100m 前後の範囲で見ることのできる看板のデータを 50～100 枚のデータ収集を目的とした。実際の調査では、タテマチストリートで 79 枚、新堅町商店街で 25 枚のデータを収集した。

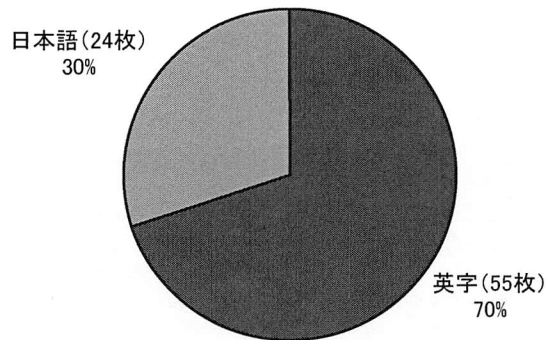
3.2. 結果

調査結果は、以下の円グラフのようになった。上から香林坊、新堅町（タテマチストリート）、旧堅町（新堅町商店街）となっている。

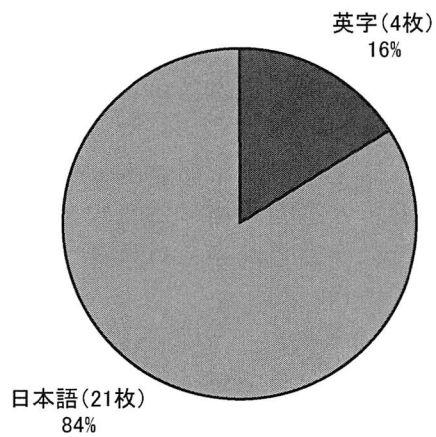
香林坊



タテマチストリート



新豎町商店街



3.3. 考察

3.3.1. 香林坊

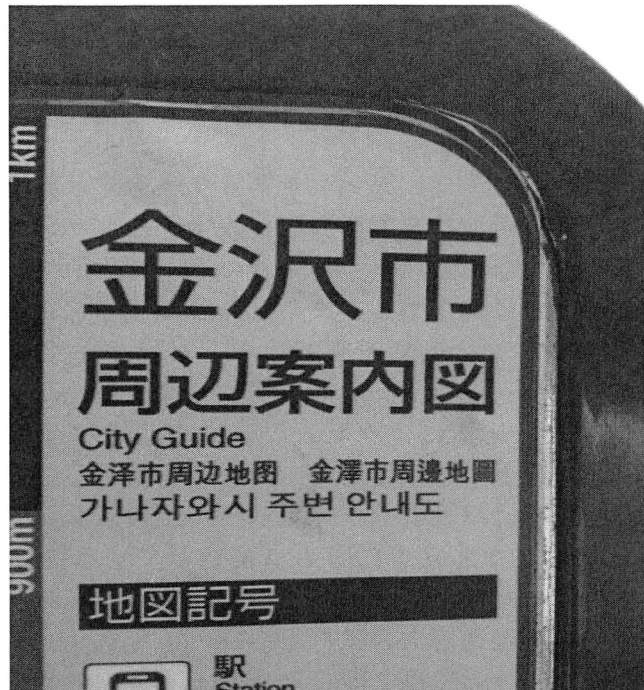
香林坊での調査では、日本語＋英語の2ヶ国語表記の看板が一番多く56%である。続いて、日本語のみの表記、日本語・英語・韓国語・中国語の4ヶ国語表記の順となる。また、調査中にポルトガル語の看板を1枚発見したが、今回は例外と見なし、調査対象から外すことにした。

まず、日本語＋英語表記が多いことは予想通りであった。近年の日本では、外国人観光客を招致することに力を入れており、英語使用可能話者が世界の中でも多いことから観光地としての機能もある商業地の香林坊では、英語表記が多くて当然だろう。また、数ある看板の中でも、観光客向けの看板には2ヶ国語表記であり、その地域に暮らしている人に向けた看板には日本語のみというような傾向もみられた。



写真例①日本語＋英語表記

日本語・英語・韓国語・中国語（簡体字と繁体字）の4ヶ国語表記が見られた看板は、ほとんどが香林坊にある大きな地図であった。その他の注意書き等の看板では今回の調査では確認することができなかった。



写真例②日本語＋英語＋中国語＋韓国語

これらをもとに考えると、香林坊では外国人観光客に向けた街づくりがある程度行われていると言えるが、兼六園などの観光地ほど徹底してはいないことがわかる。また、対象は日本人中心であり、実際に訪れる人も外国人はそれほど多くないので、韓国語や中国語を表記に追加する必要があまりないのであろう。

また、看板の種類では、案内板のほうが指示板よりも多いことがわかった。道案内等の案内板が多いのは、香林坊が観光地や商業地として機能しているからであろう。

3.3.2. 堅町

堅町の調査では、タテマチストリートと新堅町商店街の2つで傾向にはっきりと差があらわれる結果となった。

まずは使用言語について。今回の堅町の調査では看板で日本語が使われているか、またはアルファベット等の英字が使われているかを調べることにした。日本語と英字の併記の場合は字の大きさやネオン等での目立たせかたで判断し、1つの表記として目立たせているほうの表記とすることにした。

タテマチストリートでは、英字表記の看板が多く、日本語表記 24 枚 (30%) に対して 55 枚 (70%) を占めている。他方、新堅町商店街では、逆の結果となり、日本語表記が 21 枚 (84%)、英字表記が 4 枚 (16%) となった。

この結果からわかるように、タテマチストリートでは英字表記が圧倒的に多く、新堅町商店街では日本語表記が大半を占めている。タテマチストリートは新堅町商店街に比べ、新しくできた商店街であり、新しく出店する商店もこちらに集中する。また、商店の種類も若年層をターゲットにしたファッションの商店や喫茶店などがタテマチストリートの大部分を占めている。

対照的に、新堅町商店街にはファッションの商店などはほとんどなく、地元の住民を対象とした八百屋や町医者、骨董店が主であった。数少ない英字表記の商店は個性的なギャラリーや雑貨店などであり、タテマチストリートではなくあえてこちらに出店していることがうかがえる。これらの商店はまだ数が少ないが、個性的な若者に向けた商店であり、今後増えていく可能性が大いにある。

使用言語以外の傾向としては、看板の作り・看板の数が考えられる。看板の作りはタテマチストリートでは色遣いが多色であり、ネオン等も使用してある目立つものが多かった。一方、新堅町商店街では色遣いが質素なものがほとんどであり、木の看板などもあった。ネオン等は見られなかった。看板の作りからも 2 つの商店街での発展の違いがわかる。

次に看板の数である。タテマチストリートと新堅町商店街で、同程度の距離での調査をおこなったところ、タテマチストリートでは 79 枚、新堅町商店街では 25 枚であり、約 3 倍の差がでた。この結果から、看板の作りの傾向と同様に 2 つの商店街での発展の違い、利用者数の違いが分かる。



写真例③英字看板（タテマチストリート）



写真例④日本語看板（新堅町商店街）

3.4. まとめ

以上の考察結果から、香林坊では日本語＋英語による2言語表記の看板が中心に構成されている。つまり、香林坊は、商業地としての機能もあるが、外国人に情報を提供するために2言語、場合によっては4言語表記の看板を設置していることから、観光地としての機能も少なからず有していることが分かる。

堅町では、新堅町商店街とタテマチストリートの比較をもとに、現在の商店街の発展の様子と現状が明らかになった。

4. 市役所

4.0. 金沢市役所と小松市役所

言語景観の共同研究の最後として、市役所の調査結果の報告を行なう。

調査対象としたのは、金沢市役所と小松市役所である。金沢市にも小松市にも多くの外国人が居住しているが、両地域では、居住する外国人の社会的特性が異なる。金沢市は一時的な滞在の留学生が多く、小松市は外国人労働者、特にブラジルからの移民が多いからである。その違いは言語景観の形成にどう影響しているだろうか。

4.1. 調査方法

調査の方法として、市役所付近の看板、案内板を中心にデジタルカメラを用いて写真を撮り、そしてその看板などに見られる言語の種類、順番、大きさなどの観点から分類を試みた。言語の種類からはその看板などが対象にしている言語使用者が分かり、順番や大きさからは使用されている言語の優先順位が分かる。撮影する写真の目標枚数は各市役所ごとに50～100枚程度に設定した。

撮影したデータを元に、両市役所を比較しながら考察を行うことで言語景観形成のメカニズムを明らかにすることが期待できる。共同研究として観光地、商業地についても調査を行なっているため3箇所での比較もでき、またさらにそこからは街が対象としている人々という観点から経済との関わりも見ることができる。

4.2. 予想

調査を行う前の各市役所の言語景観については次のようなことを予測していた。

- ・ 金沢市役所

金沢市の人口は石川県人口のおよそ 40%を占めているため石川県内で最も多くの市民が利用する市役所である。また、先述したように一時的な滞在とはいえ留学生も多く居住しているため少なくとも一番多く利用する外国人の使用言語が日本語とともに併記されていると考えられる。

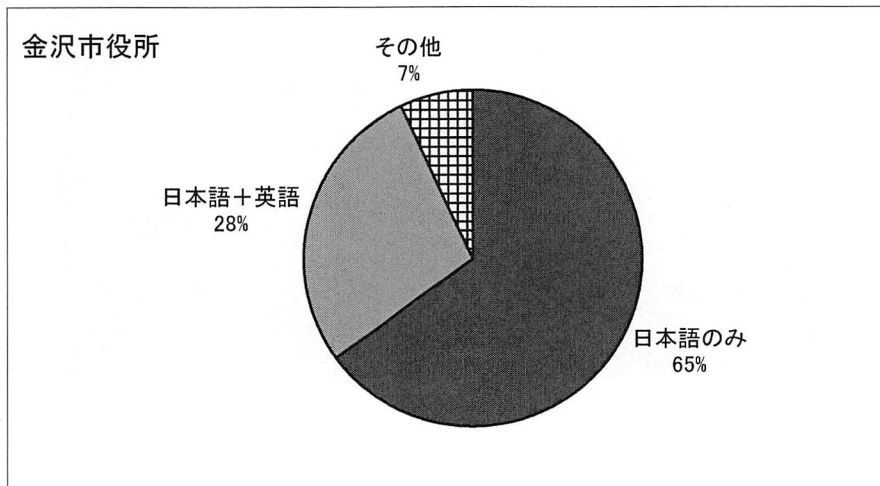
- ・ 小松市役所

小松市にも金沢市と同様に多数の外国人が住んでいるが、その中でも、とりわけブラジルからの移民労働者が多い。したがって、ブラジル人の母語であるポルトガル語が日本語に併記されていると考えられる。

4.3. 結果と考察

4.3.1. 金沢市役所

市役所付近では2012年9月28日に90枚の写真を撮影した。その内訳としては日本語のみのものが59枚で65%、日本語と英語の組み合わせのものが25枚で28%、その他が6枚で7%となった。事前に予測していたものとは大きく異なる結果となり、多言語表記はそれほど多くは見られなかった。ちなみにその他には点字表記のみのものやピクトグラムを含むものを分類した。



金沢市役所で最も多かった日本語の案内板だが、図 1, 2 のように、来庁者への案内板、どの階に何の課があるかということを示すものがあった。

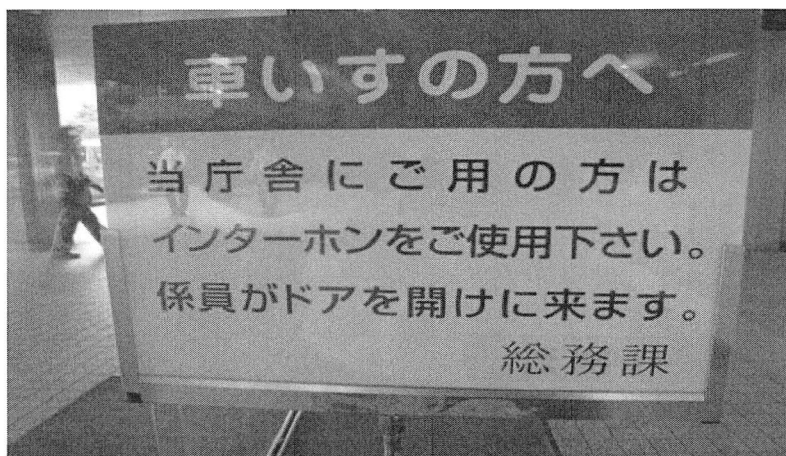


図 1



図 2

次に多かったのが日本語+英語の組み合わせのもので、このタイプのものはすべて、図 3 のような各部署の名前を示すものだった。例外的に

日本語のみで案内されているものがいくつかあった。



図 3

最後にその他である。図 4 はエレベーター前に設置されていたものだが、点字のみで案内されている。図 5 は点字とピクトグラムを併用したものになっている。

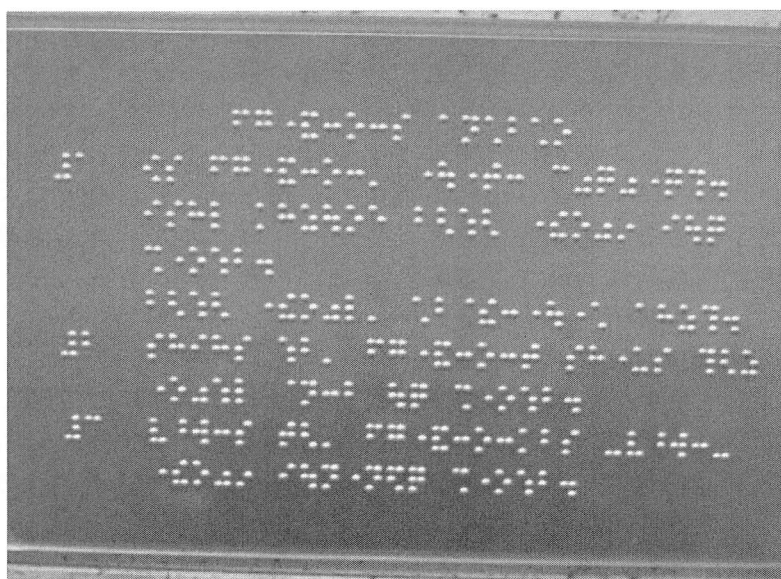


図 4

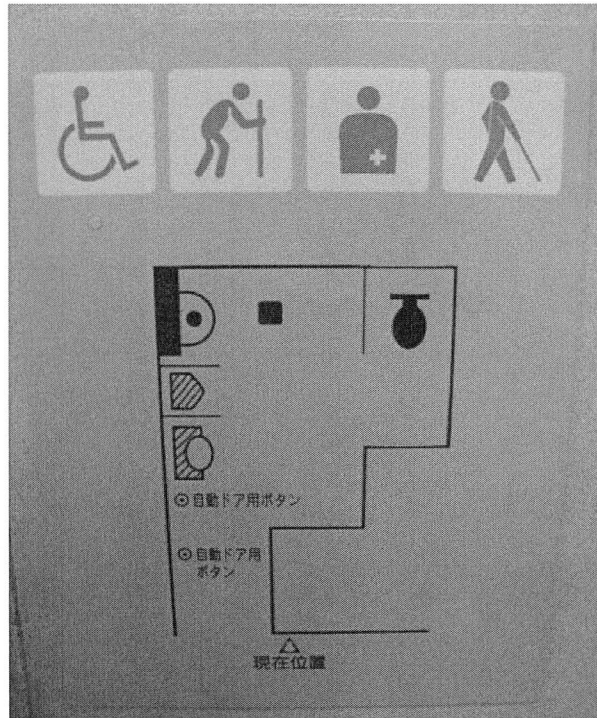
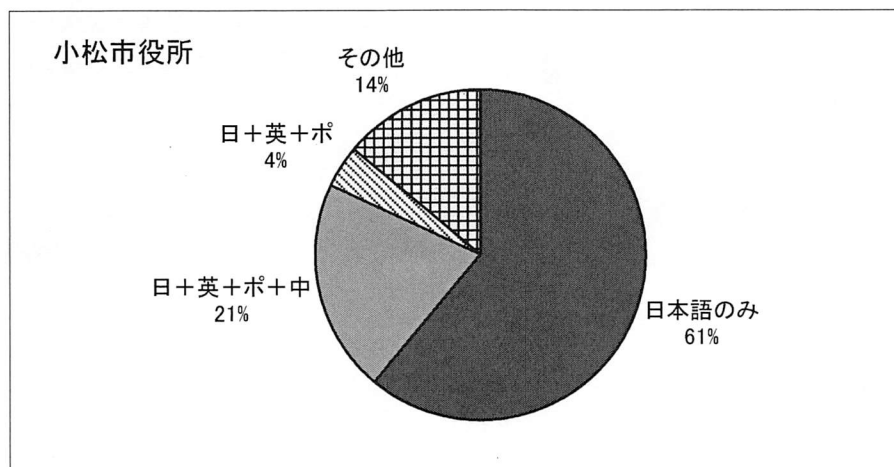


図 5

以上の結果から、金沢市役所では日本語ができない外国人の来庁者への案内がほとんど設置されていないということがわかる。日本語＋英語の案内板のように英語が使用されているものもあったが、あまりにも文字のサイズが小さいため適切な英語話者への案内がされているとは考えにくい。また、トイレ付近では点字やピクトグラムが多く使用されていた。これは、以下で見る小松市役所でも同じで、どんな人でも利用するものだからこそ多言語表記をしないで、すべての人が共通に理解可能なピクトグラムが使われているのだと考えられる。

4.3.2. 小松市役所

次に小松市役所での調査の結果だが、2012年11月21日に撮影した写真は全部で49枚、その内訳としては日本語のみのものが30枚で61%、日本語・英語・ポルトガル語・中国語の4言語が使用されているものが10枚（21%）、日本語・英語・ポルトガル語の3言語が使用されているものが2枚（4%）、その他が7枚（14%）となった。



小松市役所での調査で特筆すべきなのは日本語・英語・ポルトガル語・中国語の4言語が使用されている案内板があったということだ。下の図6では上から日本語・英語・ポルトガル語・中国語の順で保険年金課と表記されている。この4言語が使用されている案内板は1階の一番市民が利用する機会が多い課、例えば保険年金課の他には税務課など、に設置されていた。また図7は日本語・英語・ポルトガル語の3言語が併用されているものであるが、これは1階のフロアにしか見られなかった。

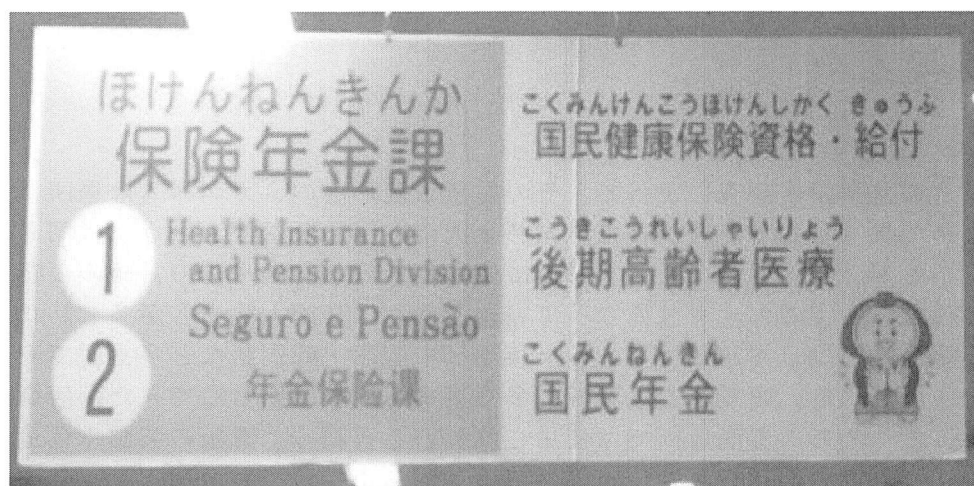


図 6



図 7

小松市役所を調査してポルトガル語だけでなく英語・中国語での案内がなされていることに驚いた。金沢市、小松市ともに外国人の人口比はおよそ1%である。この2つの市役所での言語景観の差は、居住する外国人の社会的な性質にあると考えられる。金沢市には留学生が多く、市への滞在は一時的である。自然と市役所へ行く回数も少ない。それに比べ小松市では外国人労働者が年金などを見据えた長期的な滞在をしているため、市もポルトガル語などで案内をしているのだ。実際に小松市は日本語のあまり分からない外国人へ向けた日常生活で使う簡単な日本語を載せたガイドブックを頒布している。

このように、たとえ比率では同じような数の外国人が住んでいてもその質によって市役所では言語景観に大きく差ができることが分かった。とはいえ、トイレのようなどんな人でも利用する可能性のある場所では共通した言語を用いていることも分かった。今後はこの研究を発展させ、比較可能な大学構内や病院などの言語景観についても調査していく必要がある。

4.4. まとめ

この言語景観調査によって、その言語景観形成のメカニズムは場所によって異なることが分かった。同じ金沢市内にある看板という点は同じであるが、その場所によって看板に使われている言語やその言語の表記の仕方、文字の大きさは異なっていた。例えば外国人観光客が多く訪れる観光地では日本語だけでなく、英語・中国語・韓国語など多言語で表記されていた。商業地では若者が多く集まる比較的新しくできた商店街と、古くからある商店街では使用されている言語や、看板の装飾や色遣いまでも違いが見られた。市役所では、同じ市役所でも金沢市と、外国人労働者の多い小松市の小松市役所では使用されている言語に大きな

違いが見られた。このように各地で見られる看板の言語景観は、その看板の設置される場所や目的、またその看板を利用する人によってそれぞれ異なり、その場所で最適な言語が選択されていることが分かった。

5. おわりに

今回の研究では、その研究範囲が金沢市とその周辺にとどまった。同じ金沢市内でもこのように言語景観の違いを見ることが出来たことから、他市、他県とその調査範囲を広げていけばさらに、この言語景観調査を深めることが出来るだろう。また今回調査したような施設だけでなく、全国各地から学生が集まる大学や、児童が集まる児童施設、そのほかにも駅や病院など目的や利用する人が異なった施設の調査もしていきたい。

参考文献

バックハウス, P. (2005): 「日本の多言語景観」. 真田信治・庄司博史(編) 『日本の多言語社会』 岩波書店, pp. 53-56.

「主要データ集 平成23年12月号」 石川県 (2011)

<http://toukei.pref.ishikawa.jp/dl/2344/syuyou2312.pdf>

(閲覧日:2013/01/26)

「金沢市統計データ 人口・世帯数」(毎月更新)

<http://www4.city.kanazawa.lg.jp/11018/toukeidatasyu/jinnkousetaisu.html>

(閲覧日:2012/12/01)

「平成23年度小松市統計書」(2012)

http://www.city.komatsu.lg.jp/secure/5007/toukei_h2302.pdf

(閲覧日:2012/12/01)